

昭和 20 年代における内親王の結婚：

「平民」性と「恋愛」の強調

森 暢 平

I. はじめに

昭和 20 年代、2 人の内親王が結婚した。1950 年の孝宮（昭和天皇第三皇女、結婚後に鷹司和子）と、1952 年の順宮（同第四皇女、結婚後に池田厚子）である。それ以前の研究が注目していなかった 2 人の結婚について、河西秀哉は、皇室の民主化をアピールするうえで、若い内親王が「象徴天皇制が民衆に近づいたことを実感させる存在」だったと論じた¹⁾。河西が孝宮と順宮を取り上げたのは、美智子妃ブーム（1958-1959 年）の歴史的な前提として、2 人の内親王の結婚が位置づけられると考えたからである。河西が言うように、戦前の皇室イメージを中和させるためにも女性のソフトさは重要であり、美智子妃と同様、孝宮・順宮は民衆と皇室を接合する媒介となっていた。しかしながら、河西は、内親王が身近なところで生活することへの人びとの期待があったことを指摘するものの、人びとがなぜそのような期待を抱いたのかについて踏み込んで分析していない。戦後天皇制をジェンダーの視点から捉える井上輝子の研究も、皇室が恋愛結婚イデオロギーやマイホーム主義を補強する存在になったことを明らかにし、そこにマスメディアの役割があったことを強調する。しかし、やはり、人びとの側の理由、すなわち民衆がなぜそうした新しい皇室像を受容、あるいは熱狂したのかについて説明していない²⁾。本論文は、マスメディアがあるイメージを流布するのは、そうしたイメージを求める人びとの欲望が存在するためだという立場をとる。筆者は、こうした問題意識をもとに、美智子妃ブームの時期、民主的な結婚や簡素化された婚礼などを目指した新生活運動が行われ、民衆レベルにおける恋愛観・結婚観の変化が皇太子妃ブームを支えてい

たことを明らかにした³⁾。皇族が、「平民」の世界と同じように恋をして結婚し、豊かな生活を始めるという物語に、人びとは社会の変化を感じ、明るい未来を見ようとしていたわけである。本論文はこの視点を延長し、昭和20年代においても、イエに結びつけられていた結婚の在り方の変化、経済的な豊かさへの憧れが、内親王の結婚への注目を促したという視点を提示する。

注目したいのは「平民」と「恋愛」というキーワードである。「大衆天皇制論」において皇太子妃ブームを論じた松下圭一は、美智子妃を「平民」と「恋愛」の偶像であるとしたうえで、偶像登場によって、皇室に無関心でありえた若い世代がブームに巻き込まれたと分析した⁴⁾。美智子妃は「平民」の家の出身であり、テニスを通じて知り合った明仁皇太子と惹かれ合い「恋愛」感情が芽生えた。正田美智子／美智子妃の性格・経歴・才能・美貌・出身階層、およびその経験という属人的な要素が大きく報道され、それがブームを支えたのは間違いないだろう。しかしながら、本論文が明らかにするように、孝宮・順宮の結婚においても、「平民」性が強調され、カップルの「仲睦まじさ」、つまりは「恋愛」感情が注目されていた。美智子妃という偶像の登場以前にも、人びとは、皇室の結婚に「平民」性と「恋愛」的な要素を見ようとしていたわけである。そうであるならば、「平民」と「恋愛」とは、けっして美智子妃の出身階層や経験だけに帰すべき言葉ではないはずだ。本論文は、美智子妃ブーム以前、日本が高度成長に差し掛かる以前において、人びとが「平民」と「恋愛」という言葉に何を求めたのかを明らかにしたい。

使用する主な資料は雑誌記事、とくに婦人誌の記事である。宮内記者会に所属する記者が執筆する新聞記事とは違い、雑誌メディアは、読者の読むべきものよりも、読みたいものを提供するプル型メディアという性格が強い。内親王の結婚を多く扱ったのは、出版社系週刊誌が登場する以前の大衆雑誌、主には婦人誌であり、その記事を読み解くことで、皇室・マスメディア・人びとの関係性を考えてみたい。

II. 「平民」性と「恋愛」的なもの

内親王の「平民」性

敗戦直後の皇室は、「人間宣言」で天皇の神格性を否定し、全国巡幸を通じて「国民とともに歩く」姿勢を示そうとする。宮内当局は昭和天皇一家の家族写真を何度か公表するが、人びとと同じように、家族の友愛のなかで生活していることをアピールした。人間宣言（1946年）と同時に発表された、昭和天皇と孝宮の写真は有名であり、当時16歳の孝宮は、天皇の人間化イメージ創出に不可欠な存在であったと言えよう⁵⁾。

こうしたなか1948年ごろから、孝宮がさらに注目され始める。高等科を終えて、結婚が目に見える日程に上がってきたためである。華族が廃止された当時、孝宮が「平民」のもとに「降嫁」することが確実であり、どのような形で、内親王が一般社会に「降りてくる」のかが関心の的となったのである。そして、マスメディアは、内親王の「人びととの変わらないさ」を強調して記事にしていった。たとえば、学習院女子部高等科選修を修了した直後の1948年4月、宝塚雪組の公演を見学した孝宮は、当時、熱烈な人気を誇っていたスタア、春日野八千代と懇談し、その場が報道カメラに収まった⁶⁾。同世代の若い女性と同じように宝塚の公演を楽しんでいるというイメージが流布されるのである。

この直後、孝宮は皇居を離れ、元侍従長・百武三郎邸で、1年2か月間、住み込みの「家事修業」をする。ホウキを使って居間を掃



写真1 ホウキを使って居間を掃く孝宮（読売新聞社提供）

く写真1は1948年6月、報道陣を集めて百武邸で撮影された一葉である。同時に、孝宮の庶民的なエピソード——例を挙げれば、配給品の受け取りをしたこと、ミシンを習い始めエプロンや下着などを作ったこと、代用食に慣れるために馬鈴薯やうどんを食べたこと、銀座や新宿に買い物に出かけたこと、人気ラジオドラマ「向う三軒両隣」「鐘の鳴る丘」を聞いていること——が記事になる⁷⁾。宮内記者会に所属しない雑誌メディアでも、当局は取材に応じていたようで、『入江日記』には、『婦女界』記者の個別取材に応じる様子が書かれている⁸⁾。マスメディアは、こうした当局側の便宜供与を利用しただけではない。孝宮が買い物に来る肉屋の話を取材したり、都電を利用し吊り革を持って立っている姿を偶然見かけて記事にするなど、多様な機会を利用してエピソードを紹介した。そもそも、住み込みをしたとされる百武邸は宮内府の旧奏任官官舎であり、百武一家は家事見習いの期間限定で神奈川県藤沢市から転居していた。しかし、一般家庭での住み込みを強調するためか、マスメディアはこうした事情をほとんど伝えなかった。人びとが見たかったのは「私たちの生活から遠く高くへだたつたもの」⁹⁾ではない内親王の暮らしぶりであり、官舎に住んでいたのでは具合が悪かったのであろう。

その孝宮の婚約が発表されたのは1950年1月。相手は、五撰家のひととつ鷹司家の長男・平通^{としみち}であり、同5月に結婚式を挙げた。鷹司家は旧華族の家柄であり、戦後、華族制度が廃止されたとしても、「平民」と呼ぶには、人びとに近いものではない。しかし、この結婚では、「平民」「民間」への「降嫁」であることがことさら強調される。鷹司が日本交通公社（交通博物館）に勤務するサラリーマンで、月給が当時6千円だったことも併せ、天皇の娘が「一平民サラリーマン」（『読売新聞』1950年5月21日）¹⁰⁾の妻となる出来事として受け止められた。

人びとの熱狂は大きかった。結婚式当日、孝宮は皇居から式場である高輪の光輪閣に向かい、天候はあいにくの雨であったが、皇居前広場には約2千人、高輪までの沿道には「人波がえんえんと」途切れることなく続いた（『毎日新聞』1950年5月21日、『読売新聞』同日夕刊）。天皇が象徴であることになぞらえ、婦人誌は、孝宮を「ニッポンの乙女のシンボル」¹¹⁾、「結婚適齢期の女性の“象徴”」¹²⁾と呼んだ。表1は、婚約発表直前の1949年10月から2年間、雑誌メディアが取り上げた孝宮についての記事である¹³⁾。結婚直後、多い日には1日7件も取材があり、

表 1 孝宮関係の雑誌記事 (◎は女性向け雑誌)

年	月	日	雑誌	記事タイトル	筆者
1	1949	10	婦女界◎	孝宮さまの花嫁準備日記	
2		10	社会人	孝宮様におめでた(?)	
3		1	婦人世界◎	めでたき話題：孝宮さまの御結婚	小野昇(読売新聞記者)
4		2	主婦之友◎	宮中秘話：孝宮様に佳き日の訪れを	本誌記者
5		2	主婦と生活◎	幸多きをこそ：やがて嫁ぎゆく妹に	東久邇成子
6		2	改造	人物時事解説二つの顔：孝宮和子 大谷光昭	
7		2	レポート	孝宮婚約説の真相	
8		22	アサヒグラフ	佳日近し	
9		26	サンデー毎日	およろこびを前の孝宮さま	藤樫準二(毎日新聞記者)
10		3	新婦人◎	皇后陛下の指輪と毛糸：孝宮さまの御婚約を繞りて	増田淳平
11		3	時事世界	孝宮さまおめでた	
12		3	1 毎日グラフ	天皇一家のお婿さん	
13		3	26 週刊朝日	結婚：鷹司氏なかなかの“ご名答”	
14		4	主婦之友◎	孝宮様のこと	三笠宮崇仁
15		4	婦人生活◎	サラリーマンの主婦となられる孝宮さまの御婚約	霜川修三
16		4	ホーム◎	孝宮さまの御婚約決る	本誌記者
17		4	婦人世界◎	孝宮さまの御結婚：佳き日のおとずれ	森春太郎
18		4	令女界◎	佳婿近き孝宮さま	
19		4	キング	手づくりの握り飯：おめでたの孝宮様	田中徳(共同通信記者)
20		5	主婦之友◎	(グラビア) お慶びの孝宮様	
21		5	女性改造◎	婦人の眼：鷹司平通氏夫人へ	
22		5	家庭生活◎	国民こそぞて慶祝する孝宮さまの御婚約	
23		5	月刊読売	孝宮様の婚約秘話	山田一夫
24		6	婦人生活◎	孝宮様の背の君鷹司平通氏が語る私たちの新婚生活設計	本誌記者
25		6	新婦人◎	お慶びをま近かにひかえた鷹司平通氏を訪ねて	松田ふみ子(サンデー毎日)
26		6	婦女界◎	孝宮様の背の君：鷹司平通氏一家訪問記	近藤日出造
27		6	日本トビックス	ボクのフィアンセ孝宮さまの魅力	鷹司平通
28		6	7 アサヒグラフ	ここにも新しい一頁が…：婚期	
29	1950	6	11 サンデー毎日	“和子”と呼ぶは未だらしい：新婚一週間の鷹司夫妻を訪う	松田ふみ子
30		6	11 週刊朝日	妻にズボン、はかせない：新婚一週間	鷹司平通
31		6	20 毎日グラフ	新居は毎日お客攻めです	
32		6/7	博愛◎	鳩の巣のある新居	青田透
33		7	文藝春秋	青葉のひととき：鷹司新夫妻を囲んで	辰野隆・徳川夢声
34		7	あこがれ◎	日本一の御夫妻を祝して	東久邇成子・ノエルス エット・百武夫妻
35		7	青春タイムス	孝宮さまの御新婚初夜	
36		8	主婦之友◎	新家庭日記	鷹司和子
37		8	主婦と生活◎	鷹司ご夫妻の新家庭を訪ねて	柴田早苗(女優)
38		8	婦人生活◎	(グラビア) 全女性の祝福に輝く鷹司和子夫人の新婚生活画像	
39		8	婦人画報◎	(グラビア) 鷹司平通・和子夫妻の新家庭を訪ねて	
40		8	スタイル◎	鷹司御夫妻の新家庭訪問記：香り高い微笑に満ちたこの世ならぬ“御一対”	古屋信子(小説家)
41		8	家庭生活◎	鷹司平通氏夫妻を訪う	本誌特派記者
42		8	ホーム◎	孝宮さまの御結婚	本誌記者
43		8	婦人世界◎	歴史的結婚式	森春太郎
44		8	少女サロン◎	華かな御婚儀アルバム：お慶びの日の孝宮さま	
45		8	オール読物	(一頁訪問) 鷹司和子	
46		9	女性改造◎	人間皇女の恋	菊名三郎(社会評論家)
47		9	近代映画	おめでとう御座います：話題の鷹司御夫妻を訪ねて	鷹司夫妻・久我美子・桂 木洋子
48		9	富士	(グラビア) 名士花形御手並拝見：夫唱婦隨のワツフル焼	
49		10	新女苑◎	皇后様へ：新婚初のお便り	鷹司和子
50		12	婦人世界◎	漫画探訪：鷹司和子夫人の迷惑日記	筑摩鉄平
51		10	新婦人◎	(カラグラビア) 生涯の晴れの日の装い	
52		12	女性改造◎	おめでたはまだ？：和子夫人	
53		4	4 アサヒグラフ	新居は愉し	
54		5	新女苑◎	サザエさんの鷹司夫妻新居拝見	長谷川町子(漫画家)
55	1951	6	主婦と生活◎	鷹司ご夫妻の新居訪問：和子・平通さんと呼び合って	本誌記者
56		6	婦人生活◎	私たちの新居	鷹司平通
57		9	婦人朝日◎	皇居でのひととき	鷹司平通

※同じ日に、孝宮関連の2つの記事/グラビアがあった場合は、代表的な1つだけを掲載した。

新婚3カ月で訪問者の名刺が4寸にもなってしまうほどだった¹⁴⁾。収集した57の記事中、およそ3分の2(36記事)は、女性向け雑誌(表では誌名のあとに◎)であり、婦人誌にとって孝宮の結婚は読者を惹きつける重要なコンテンツであったことが分かる。読者投票で選ばれる1950年の『読売新聞』年間ニュースで、この結婚は10位であり、「一サラリーマンの奥さんや和子になられる……この結婚によせた国民の関心は大きく、まさに“世紀の結婚”であつた」と論評された(『読売新聞』1950年12月20日)。

マスメディアは、鷹司夫妻に「平民」「サラリーマン夫妻」などの言葉を多用するが、この場合の「平民」とは階層を表す言葉であるというよりも、むしろ「私たちと同じ」「私たちと近い」という意識、言い換えれば「庶民性」という程度に使われていたことに注意する必要がある。

自由意思と交際

孝宮の結婚にあたって、もう一つ、強調されたのは、2人が「自由意思」で結ばれたことである。皇族会議で一方向的に決定される戦前皇室のやり方が改革されたのだと受け止められた。だが、以下で見るように、結婚の経緯は、従来型の「見合い」であった。人びとは、この過程のどこに自由意思を見ようとしたのだろうか。

京都の地方紙『都新聞』は1949年9月6日、東本願寺法主の長男である大谷光紹と孝宮との婚約の噂を報じた¹⁵⁾。同5日に大谷の両親は渡米したが、2カ月半後の帰国を待った『読売新聞』(1949年11月23日)は、大谷との婚約が「順調に進んでいる」と特ダネ風に報じた。大谷の母は香淳皇后の妹、智子であり、孝宮と大谷はいとこ同士であった。しかし、近親結婚を避けた天皇の意向や、大谷が米国留学を予定し、留学生の妻として渡米すべきかどうかが問題となった。こうしたことから大谷との婚約話は『読売新聞』報道の直後に消える¹⁶⁾。大谷に代わり、鷹司との結婚話を進めることは1950年新年早々、昭和天皇の了承を得て決定した¹⁷⁾。鷹司家では1月20日に田島道治宮内庁長官に受諾の返事をする¹⁸⁾。同26日午前、長官官舎で孝宮と鷹司が顔合わせをし、同日午後、婚約が発表される。

鷹司との婚約話は1949年秋ごろからあり、「見合いというような固苦しいものでなく何回か」、2人は会い、打ち解けた話ができる間柄になっ

ていた（『時事新報』1950年1月27日）。ベテラン皇室記者であった藤樫準二によると、鷹司の父・信輔と皇太后（貞明皇后）はいとこ同士であり、その関係で皇太后が住む大宮御所に鷹司が参上する形で引き合わせがあった。そこで「楽しい歓談」があり、そのなかで、孝宮が鷹司を「実直で真面目な方」、鷹司は孝宮を「おとなしい好い方」と互いに惹かれ合ったと藤樫は伝えた¹⁹⁾。

婚約までの経緯の伝わり方は、姉の照宮が結婚までほとんど相手と話さなかったような過去の皇族の結婚とは変化したものであった。事実上の「見合い」ではあるが、本人たちの自由意思が尊重されたと受け止められたのである。それから結婚までの4カ月間、マスメディアは、婚約後に2人が頻繁に会っていること、音楽という共通の趣味が2人を強く結びつけていることを強調する。納采の儀を伝える『読売新聞』（1950年3月4日）によれば、鷹司は万世橋の交通博物館からの仕事帰り、3日に1回程度、孝宮ら内親王が暮らす皇居・呉竹寮を訪問した。夕食をともにしたり、新居の青写真を話し合った。この日、呉竹寮で撮影されたツーショット写真も公表される。婚約中とはいえ、結婚前の女性皇族が、男性と語らう姿を見せることは、戦前の皇室では考えられないことであったため、多くの読者に「さわやか」な印象を与えた²⁰⁾とされた。また、孝宮はピアノを弾きクラシックをよく聞くなど音楽好きであり、一方の鷹司も作曲が趣味で合唱団に所属していた。天皇誕生日の内宴の際、鷹司が作曲した童謡を孝宮が伴奏し、妹の清宮が歌うというパフォーマンスがあり、側近たちを感激させたこともあった²¹⁾。こうした逸話はそのまま、「仲睦まじさ」としてマスメディアを通じて流布し、「まったく普通の恋人たちと変わらないお交際」とされたのである²²⁾。

岡山での牧畜業の妻

続く順宮の結婚でも、やはり、「平民」性と、「恋愛」感情が目目された。相手は、岡山在住で、婚約発表時24歳の池田隆政である。池田は旧岡山藩主家の長男であったが、生まれも育ちも東京であった。だが、学習院高等科（旧制）卒業後、大学には進まず、父祖の地で牧畜業を始める。婚約発表は1951年7月であった。

天皇の娘が、都を離れ遠くに「降嫁」するのは「幕末、和宮東下以来のこと」²³⁾で、皇女がはるばる岡山まで嫁ぎ、しかも、牧場主の妻にな

ることが、人びとに近いところに「降り」てきた象徴的な出来事として受け止められた。婦人誌には「皇族が、こんなにまで国民大衆のちかくに、住もうとなさつたことが、最近あつただろうか」²⁴⁾、「内親王さまの地方ご定住という破天荒の記録を生んで、ここに出来上るであろう若き牧場主新夫妻の、輝かしいスイート・ホームを想像するとき、国民の誰しものが……新たな感激に打たれるにちがいなかろう」などの文章が見える²⁵⁾。「岡山」「牧畜業」という要素が、人びととの近さを示すキーワードになったのである。

2人の初めての出会いは1951年4月。順宮が清宮とともに中国・四国を旅行した際、マスメディアに知られない形で、池田と事実上の「見合い」をしたことである。5月に入り稲田周一侍従次長が岡山で池田と会い、その直後、皇后が順宮に気持ちを聞くなどした²⁶⁾。これが、単なる「見合い」ではなく、本人たちの自由意思を確認した新しい結婚の形と受け止められた。発表直後の地元紙の報道によれば、「順宮様をお好きですか」という直接的なインタビューに対し、池田は「エ、好きです」「僕が大体生き物が好きで、牧場などを経営する気になつたんですが、宮様も小鳥など生き物が非常にお好きで話がよく合うのです、そんなところから好きになつたわけです」と答えている（『夕刊岡山』1951年7月12日）。ただ、池田は岡山在住であり、鷹司と孝宮のように呉竹寮で頻繁に会うことはできなかった。しかし、マスメディアは「お会いするごとにお互いの理解と愛情が深まる」「遠い岡山に行っても隆政さんがいるんですもの、さびしくはないわ」（『朝日新聞』1952年1月1日）などと順宮の言葉を紹介することで「仲睦まじさ」を報じていく。2人は岡山・東京間で文通をしており、「文箱に、三通、四通と文が、たまるにつれて愛情は深まった」という物語が語られるのである²⁷⁾。

活字メディアにとっては右のような談話で十分だが、ニュース映画、あるいはグラフ雑誌など「絵」が必要なメディアにとっては、さらにツーショットが必要となる。その機会は1952年4月、順宮の岡山入りで訪れた。新居を確認するための2泊3日の旅行である。完成間近の新居を見学した順宮は、池田の差し出す傘のなかに「むつまじく」入り、カメラマンの「笑って下さい」などの注文にも応えるなど「すっかり平民的」であった。順宮がベランダの端に立つと、池田が「『おっこちますよ』とだきかゝえるように自分の方に引きよせるというほゝえましい

風景」まであった（『山陽新聞』1952年4月15日）。

実際の結婚は、婚約発表の1年3カ月後の1952年10月になった。皇太后（貞明皇后）が急逝したため、服喪の期間が必要だったためである。孝宮に次ぐ戦後2番目の結婚であったことや、結婚まで時間があり話題が間延びした感があったため、「孝宮さまの時ほどさわがれまい」²⁸⁾という予想があった。しかし、歓迎ぶりは、孝宮を上回る。皇居前広場には、オフィスガール、遊覧バスを連ねた「お上りさん」ら約5千人が見送り、結婚式場の高輪・光輪閣前にも約3千人が迎えた（『毎日新聞』



写真2 池田隆政のネクタイを締める厚子（『婦人生活』1953年1月号）

1952年10月10日夕刊)。新郎新婦は式の5日後、寝台列車で岡山に向かった。東京駅では見送りの人並みで前に進めない場面もあり、「押寄せるミーちゃん、ハーちゃんにもみくちやにされ」た（『日本経済新聞』1952年10月16日）。歓迎ぶりは岡山でさらに激しく、岡山駅に出迎えた約1万人で夫妻はオープンカーになかなか乗れず、車上の人になってからも車が立ち往生する混乱となった（『山陽新聞』1952年10月17日夕刊）。地元紙では、新夫人を雲の上に祭り上げ、特別扱いすることはよくないと、岡山県知事が心構えを説いていた（『山陽新聞』1952年10月10日夕刊）が、全く逆の歓迎となってしまった。新夫人はしばらく買い物にも行けない状況だったという²⁹⁾。式典などへの招待が相次ぎ、牧場の仕事に支障が出ることを懸念した池田自身が記者会見して、新規の招待は辞退させほしいと了解を求めるほどだった（『夕刊岡山』1952年10月25日）。

『読売新聞』の10大ニュース投票では、孝宮の10位からやや下がるものの、しかし12位（『読売新聞』1952年12月17日）。表2は、婚約発表から2年間、順宮／池田厚子を扱った雑誌記事である³⁰⁾。姉と同様、

表2 順宮関係の雑誌記事 (◎は女性向け雑誌)

年	月	日	雑誌	タイトル	筆者
1	8	1	毎日グラフ	順宮さまご婚約	
2	8	1	アサヒグラフ	おムコさんは牧場主：順宮さま御婚約	
3	8	5	サンデー毎日	三国一の牧場主：池田隆政氏の生活から	
4	8	10	毎日グラフ	順宮さまご婚約	
5	9		主婦と生活◎	若き牧場主の奥さまに：順宮さま池田隆政氏とご婚約	田中徳
6	9		婦人生活◎	順宮さまの御婚約：瀬の君は一青年牧場主、岡山藩主の後裔池田隆政氏である	山口行夫
7	10		婦人画報◎	若き牧場主の素描：鳥取の池田が見た岡山の池田家の人びと	池田徳真
8	10		家の光	順宮さまを迎えるよこぎの池田牧場を訪ねて	本誌特派記者
9	10		キング	順宮様のお婿さん訪問記：御婚約成つた若き牧場主池田隆政氏と語る	白川十郎
10	10		読切小説倶楽部	(グラビア) 順宮厚子内親王と池田隆政氏	
11	11		富士	皇婚に内定した好青年池田隆政氏	
12	12		新女苑◎	順宮様おめでとう：妹への手紙	鷹司和子
13	1		主婦と生活◎	やがて順宮様を迎える岡山の池田牧場訪問記	南部脩一郎 (映画評論家)
14	5	1	毎日グラフ	順宮様を待つ家	
15	5	4	サンデー毎日	池田牧場のお姫さま：新居御訪問の順宮	多田範 (毎日新聞岡山支局記者)
16	6		主婦之友◎	(グラビア) 順宮様のお嫁入り準備画報	
17	6		婦人朝日◎	順宮さまをお迎えするために……：池田隆政氏が設計された愛の新居	稲垣記者
18	6		母の光◎	国民の話題：吉備の野に白百合と咲かん	田中徳
19	7		主婦之友◎	順宮さまと池田隆政氏の新しいお住い拝見記	本誌婦人記者
20	7		婦人倶楽部◎	お慶びの日を待たれる順宮様と一問一答十六題	柳川麗子 (本誌記者)
21	7		主婦と生活◎	(グラビア) 順宮さま新婚ホーム訪問スナップ	
22	8		家の光	(グラビア) およこぎの日近き順宮さま	
23	8		平凡	私の学友順宮様のこと	久我美子 (女優)
24	9	28	サンデー毎日	晴れのお興入れを待つ新居：喜びの日間近かの順宮さまと池田隆政氏	多田範
25	10		婦人生活◎	池田隆政氏を岡山に訪ねて：順宮様と御結婚の日近い	阿部曉子 (作家)
26	10	1	家庭よみうり	お慶びの順宮さま：10月10日にご婚儀	
27	10	26	週刊読売	“牧場の花嫁” 24時間	伊藤・奥井・藤木記者
28	10	29	アサヒグラフ	順宮さま嫁入り道具	
29	11		婦人生活◎	(グラビア) お慶びの日近い順宮さま思い出アルバム	
30	11		婦人朝日◎	お目出度の順宮さまにお贈りする言葉	鷹司平通
31	11		富士	順宮様の御婚儀	平野素邦 (中日新聞記者)
32	11		世界画報	順宮さま晴れの御婚儀	
33	11	1	毎日グラフ	天真らまんの蜜月	
34	11	5	アサヒグラフ	厚子夫人お国入り	
35	11	23	週刊サンケイ	マンガルボ：牧場の新家庭を訪ねて	清浦ちず子 (漫画家)
36	12		主婦之友◎	御新婚の夜に池田隆政氏夫妻を訪ねて：花嫁となられた順宮様と特別会見	本誌婦人記者
37	12		婦人世界◎	牧場主夫人への道：順宮さまと池田隆政氏のご結婚	
38	12		平凡	宮中のクラス会：順宮様にお招きを受けて	久我美子
39	12		国際文化画報	順宮さま晴れの御婚儀	
40	1		婦人倶楽部◎	新婚の夢もまだかな厚子さまの新妻ぶり拝見	吉尾なつ子 (小説家)
41	1		主婦と生活◎	新婚の池田ご夫妻をお訪ねして	本誌記者
42	1		婦人生活◎	池田隆政氏と厚子夫人の新婚生活を岡山に訪ねるの記	阿部曉子
43	1		婦人朝日◎	新家庭の厚子さん	
44	1		小説倶楽部	(グラビア) 厚子さん御結婚	
45	新春		主婦之友◎	私の幼い主婦日記：池田隆政氏夫妻の新婚生活	池田厚子
46	1	4	サンデー毎日	私の新婚日記	池田厚子
47	2		講談倶楽部	家庭新百景新婚の宿：池田隆政氏夫妻	
48	2		サングラフ	(グラビア) 私の新春日記	
49	4		スタイル	新婚三ヶ月の池田厚子夫人を訪う	河東駿
50	5		婦人生活◎	池田厚子夫人をかこんで新婚生活の御感想を聞く：山陽乙女の青春会議	池田厚子・小川梅子ほか
51	7	19	週刊読売	タバコ屋の看板娘になった厚子姫	読売新聞記者

婦人誌を中心に多数の記事が書かれた。「平民」性が強調されたうえで、互いに惹かれ合い、交際の末に納得して結婚し、仲睦まじい新婚生活を送っているという「恋愛」要素がちりばめられた記事や写真が多い（写真2）。

Ⅲ. 見合いと恋愛の間

戦後の恋愛と結婚

内親王の結婚でなぜ「恋愛」と「自由意思」が強調されたのかを考えるために、ここでは、当時の婦人誌が恋愛・結婚についてどのように扱っていたのかを検討する。具体的には、占領期に6大婦人誌と呼ばれた『主婦之友』（主婦之友社、1917年創刊）、『婦人倶楽部』（大日本雄弁会講談社、1920年創刊）、『主婦と生活』（新元社→主婦と生活社、1946年創刊）、『婦人生活』（同志社、1947年創刊）、『婦人世界』（ロマンス社、1947年創刊）、『ホーム』（ハンドブック社→ホーム社、1947年創刊）の、1946年1月号から1948年12月号までの3年間のすべての記事のなかから、恋愛・結婚に関係する記事を抽出して、その言説を分析した³¹⁾。対象となった記事は6誌合計で、67記事で、総計327頁だった。その結果、4つの代表的な言説が見られた。

第一に、家と家との結びつきという側面が強かった従来の結婚の在り方を民主化しなければならないという言説がある。「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立」とする日本国憲法が制定された戦後日本においては、若い人たちは、自身の責任で恋愛し、結婚することが必要だと、新しい恋愛・結婚の形を希望する言説である。婦人誌が盛んに掲載した若者たちによる座談会のなかでは、農村では自由結婚の余地が依然として少なく恋愛が軽蔑される傾向にあるとの嘆きが多い³²⁾。

第二に、自由のはき違えから貞操を重視しない戦後世代の考えや行状を嘆く言説がある。相手を好きになったらすべてを許してよいと、文芸作品や一部ジャーナリズムが煽っていることや、貞操を軽視する傾向への憂えである。作家・高見順は、肉体交渉を安易に行う傾向が強くなっているが、米国では結婚まで肉体の関係に進まない場合が多いと、戦後日本の行き過ぎに警鐘を鳴らす³³⁾。一部の若い女性が、「性の解放を旨

目的に享受しようとしつゝある」³⁴⁾ ことへの懸念が背景にあるだろう。

こうした価値観の混乱のなかで、自由と放縦を調節するための第三の言説として、恋愛と結婚を強く結びつける言説が挙げられる。たとえば、社会事業家で参議院議員（緑風会）の宮城タマヨは、恋愛は火遊びであってはならず、責任と反省を持って必ず結婚で終わらせたいと述べる³⁵⁾。評論家の杉森孝次郎も、社会としても個人としても、恋愛が結婚を伴うように心掛けなければならないと主張する³⁶⁾。母親代表として娘への気持ちを日記形式でつづった内山恒もまた、恋愛したら肉体の交渉に入る前になるべく早く社会的束縛としての結婚の発表という形式に入るべきだと強調する³⁷⁾。敗戦後、恋愛と結婚をことさら結びつけ、結婚を前提としない恋愛を社会的に統制したことは、家族社会学者の山田昌弘によって指摘されている³⁸⁾ が、婦人誌の言説のなかにもそれが確認できる。

最後になるが第四として、恋愛結婚が最終的には適切な在り方だとしても、男女の自由な交際がまだ十分に発展していない日本においては、「見合い」結婚も一概に否定されないという言説が存在した。『婦人倶楽部』の座談会で、ある青年医師は、恋愛から入り互いに理解し合っただけの結婚が理想だが、男女が親しく交際できる設備や組織がない日本においては、「見合い」結婚もやむを得ないと述べる³⁹⁾。こうした議論は、「見合い」であっても、十分な交際を経て、恋愛に進んでから結婚するのが理想という言説に繋がる⁴⁰⁾。この点が、本論文との関連では最も重要である。厚生省優生結婚相談所の山際よし子は、長い間封建制の殻に閉じ込められていた日本人は、自覚や判断力が乏しいため、冷静な判断のもとにおかれる「見合い」結婚には、理想に近いものがあると主張する⁴¹⁾。徳川夢声もまた、封建的な習慣を取り去ることができない時代のなかでは、「見合い」結婚がダメと言い切るのには「現実問題としてまだ尚早だ」と言っている⁴²⁾。つまり、過去の「見合い」のような家と家のお仕着せの形はよくないが、本人たちの意思をくみ婚約中の交際のなかで恋愛感情が芽生えて結婚するのが現実的だという議論である。たとえ、「見合い」であっても恋愛要素をつけ加えなくてはならないとされたのである⁴³⁾。

ここで考えるべきは、「見合い」結婚と「恋愛」結婚を二項対立としてとらえてきたこれまで思考の単純性である。これについて、家族社会

学の安藤由美は、戦前の結婚が社会階層差を温存・助長していたという考えや、愛は階層差を越えるという文学的モチーフが戦後の人びとに支持され、恋愛結婚言説が生まれたが、厳密に言えば、それは、非「見合い」婚というべきだと主張する。恋愛結婚と呼ばれたものでも、たとえば会社の同僚のなかから相手を見つけるように、純粋に自由な恋愛感情から結ばれるのではなく、互いの階層性への意識があったと安藤は指摘する⁴⁴⁾。たしかに、結婚の形態に、「見合い」「恋愛」の2種類しかないのではなく、さまざまな在り方が存在していたはずである。安藤は、戦前と違う結婚の姿が恋愛結婚とラベリングされ、研究者でさえ内実を疑わなかったと指摘する。安藤の指摘を敷衍すれば、「見合い」と分類される結婚にも、婚約期間中に交際が深まり、恋愛に発展した形もあるはずである。

このことは、美智子妃の結婚が、果たして、「見合い」結婚か「恋愛」結婚かという論争の枠組み自体の有効性を疑う貴重な指摘である。ただ、ここでは、当時、戦前とは違う形の結婚、家と家との結びつきという従来の在り方への反省が、恋愛結婚言説に繋がっていることを確認するとどめる。

内親王の恋愛

恋愛と結婚をめぐる以上のような文脈のなかで、2人の内親王が結婚する。雑誌記事は、当時の恋愛と結婚をめぐる言説のなかに、内親王の結婚を位置づけた。婦人誌『新婦人』は、婦人問題評論家である大浜英子が、大手新聞の記者4人と「戦後派恋愛結婚の在り方」と題し対談しているが、議論の途中、孝宮の結婚が「民主的な宮様の御婚約」との小見出しでのもとで語られている。記者の一人が、地位と身分のある大谷との婚約話もあったが、一市民である鷹司のほうが民主主義の姿からすれば模範的だったと発言すると、他の記者も、婚約中に交際があったことや、孝宮が家事を自分で行うことなど、この結婚のプラス面を次々に挙げた。そして司会役の大浜が、日本における「恋愛、結婚に対する蒙を啓いた」とこの結婚を高く評価して、議論を縮めている⁴⁵⁾。大谷と結婚すれば本人同士の意思を無視した形になるが、鷹司との結婚は「婚約中に交際」があり、それが恋愛につながったのだという議論である。

婦人誌のなかでは硬派の論壇誌であった『女性改造』では、社会評論

家・菊名三郎が、孝宮の結婚を論じた。菊名は、東大・京大という秀才コースでもないうえ⁴⁶⁾、五摂家といっても斜陽華族であり、給料も高くない、痩せて色黒だと、鷹司をさんざんに評価したうえで、それにもかかわらず孝宮が鷹司を選んだのは、音楽という共通の趣味があったからだ⁴⁷⁾と強調する。そして「皇女自身が自らの意志により、多少にかかわらず恋愛の情をふくめて、配偶者を決定した」ことは、「当事者の意志を無視して結婚が行われたり、恋愛結婚がいまだに罪悪視されたりしている今日」、宮廷における「革命」であると論じる。菊名は「過渡期的な要素を残しているにせよ、強い個人の意志をうかがわせているのが喜ばしい」と結んだ⁴⁷⁾。皇室こそ民主化の見本であるという意識である。

菊名が過渡期という言葉を使ったのは象徴的であった。恋愛要素が徹底的に強調される明仁皇太子と美智子妃の結婚と比べれば、孝宮・順宮の結婚で恋愛要素は小さい。しかし、人びとはたしかに恋愛要素を見て取っていた。宮内庁の官僚自身、「見合い」と「恋愛」の中間に位置づけていることは、米国の週刊誌『タイム』の取材に、宮内庁の情報源が「恋愛でも見合いでもない、中道の結婚だ」と答えていることから分かる⁴⁸⁾。

IV. 憧れと批判

豊かさへの憧れ

恋愛要素が入った新しい結婚の形は、人びとの理想の姿であった。婦人誌『新婦人』は、東條写真館で撮影された孝宮と鷹司の記念写真を独自に入手し、巻頭カラーグラビアに掲げた（写真3）。見開きの反対ページにあったのは、写真館が併設する結婚式場、東條会館の広告であった⁴⁹⁾。若い女性読者は、孝宮の結婚のなかに、自分自身の結婚を投影したのであろう。

新しい生活への理想を、内親王の結婚に読み込もうとした意識もあった。敗戦のどん底から立ち上がった当時の日本において、孝宮の結婚生活は、米国的な豊かさを予感させる生活であり、人びとはその合理性・効率性にも憧れたのである。たとえば、理工系出身の鷹司は、電化した洋式の暮らし、時間を節約する合理化生活を強調し、孝宮が埼玉県朝霞



写真3 婦人誌『新婦人』（1950年10月号）が掲げた鷹司夫妻の記念写真（左）。右頁は、東條會館（結婚式場）の広告になっている

の米軍住宅を見学し、米国式台所を見て「出来ればあんな風にしたい」と語ったことを伝えている。『婦人生活』は「電気冷蔵庫、電気洗濯器、自動式パン焼器……いつさい電化された機械的な台所、これはすべての日本の主婦が憧れの標であるわけだが、やはり主婦となられる孝宮さまの御希望でもあるらしい」と書く⁵⁰。写真4は、結婚直後に撮影された一葉であるが、トースターを使いパン食が中心であるという説明と併せ、洋風かつ文化的・効率的な暮らしに見える台所である。のちの美智子妃のキッチンでの写真（『朝日新聞』1961年10月20日など）と同じように、人びとは、豊かな生活への夢を皇室に託した。『女性改造』は、孝宮の結婚について次のような記事を書いている。

世の若き娘たちは、満たされぬ自分たちの夢を、あなた方二人の生活（立派に実現出来る）に描いて胸をときめかせたり、ほほえんだり、一ふっと現実にかえて悲しんだりするのです。現代のシンデレラ姫、そうです。正しく貴女はその第一人者です。何百万の娘たちが、戦争で恋人をうばわれ、家を焼かれ、親兄弟を失ったこの現代において、あなたは最大限の幸福を文字通り享受出来る人なのです⁵¹。



写真4 台所でポーズをとる鷹司和子
（『主婦と生活』1950年8月号）

孝宮を「現代のシンデレラ姫」と呼んでいる。女性皇族の婚姻は、民間への「降下婚」であるから、その意味ではシンデレラの比喩はおかしい。だが、米国風の豊かな暮らし、夫からの愛情を享受できる幸せな暮らしの意味では、人びとのシンデレラ願望（上昇を目指す願望）を満たす結婚であったのである。

順宮の結婚に対しても、人びとは、豊かさへの希望を読み込んだ。岡山の牧場内に建設された新居は総工費300万円の平屋37坪で、

けっして広くはないが、食堂式居間には、食卓面が自由に伸縮する米国の最新式のテーブル、マントルピース、ソファなどが置かれた。台所は、「近代家庭台所展覧会に出てくるような白タイル張り」である。また、寒い冬を迎える花嫁の身を案じた池田家の気遣いで、4坪のサンルームが急遽、増設された⁵²⁾。嫁入り道具は、梱包で百数十個、トラック6台分あり、新居には入りきらず、一部が蔵のなかに納められた。荷物を入れた新居は、寝室を含め報道陣に公開され、東芝製電気洗濯器、三菱製電気冷蔵庫、ビクター製電気蓄音機、シンガー製ミシン、ヤマハ製ピアノ、精工舎製大理石置時計、寄木細工の裁縫箱、銀製の食器類などがそろっていた⁵³⁾。映像や写真を見た人びとは、漫画『ブロンディ』で見るとような米国的な暮らしを想像できたのである⁵⁴⁾。

さらに、順宮はもともと理科系科目が得意で、学習院短大家庭生活科を卒業したこともあり、台所・家庭での生活科学に詳しいとされていた。科学的知識が深く、生活を科学する主婦像が期待されたのである。地元、岡山大学学長の清水多栄（生化学）は、米食一辺倒だった日本人の食生活は今後変わるべきであり、牛乳・バター・肉類を生産する牧場が必要ないま、池田牧場に順宮を迎えることは「大きな喜び」だと論じた（『山陽新聞』1952年10月10日夕刊）。ここでは2人の結婚が、日本人の生活改善に結びついている。

孝宮・順宮の2人とも、夫の実家でなく、独立して夫婦だけの新居に暮らし始め、核家族のモデルとなっていることも興味深い。鷹司家の場合は戦前の邸宅が戦災で焼けたため、池田家の場合は両親が東京に住み独立した息子が岡山で牧畜業を営むためという特殊事情によるものだが、両親と同居しないという核家族の形も新しさを感じさせるものだった。

美智子妃ブームのときに報じられたあやかり婚も、すでに話題になっている。孝宮の結婚式の日には、東京・日本橋のデパートで14組など都内の各所で普段の2倍以上の挙式があった（『日本経済新聞』1950年5月20日）。順宮の結婚と同じ日には、東京大神宮で21組、東京会館で7組、岡山市内の主要3神社で22組の挙式があった（『読売新聞』1952年10月10日夕刊、『山陽新聞』同月11日夕刊）。数は少なけれども、ここでは多寡の問題より、当時の人びとの間にあやかりたいという意識が存在していたことが重要であろう。

質素さの強調とのズレ

宮内庁や新しいカップルがアピールしたかったのは、豊かさではなく質素さであった。ここに、一方で豊かさのイメージを求める人びとの意識とズレが生じていたことは注意する必要があるだろう。

孝宮の結婚では、新居は千駄ヶ谷にある旧社長宅の洋館に決まったと共同通信電が報じたことがあった⁵⁵⁾。これに対し、鷹司自身が『朝日新聞』（1950年3月7日）の投書欄で「六千円ベースの一サラリーマンが八十坪もの大邸宅に住まえるとお思いですか。……私はいうまでもなく一介の日本国民にすぎぬのです……」と苦言を呈している。中古住宅とはいえ、庶民感覚からかけ離れた大きな洋館に住むことは、人びととの「近しさ」を考えると好ましいイメージではなく、わざわざ投書欄に反論したのである。結局、新居は同じ千駄ヶ谷の式部官長が持つ敷地に新築することになったが、入江は「新生活の上で簡素一点張りの裏付があればそれでもよからう」と記している⁵⁶⁾。宮内庁にとって、新生活が「簡素」に見える必要があった。結婚式の2日前、孝宮の家財道具がトラックで新居に到着したが、もっとも後部に積まれていたのは、庭ボウキと塵取りであった（写真5）。豊かな「嫁入り道具」だけではなく、「平民」らしさが撮影されることを意識したのであろう。宮内庁は結婚から2年経った段階でも鷹司の生活が贅沢と見られることに神経質に



写真5 トラックで運び込まれた孝宮の嫁入り道具。写真写りを意識してか、ホウキが目立つところに置かれている（毎日新聞社提供）

なっており、鷹司の自動車購入問題について幹部たちが協議している。自家用車を買えるような暮らしをしてもらってはならなかったのであろう⁵⁷⁾。

順宮の結婚についても、「タンスは、今までお使いのものをけずりなおしたり衣裳も一部新調のほかはすべて母君皇后さまのお古を再生」するなど、「何事も質素に」という方針が強調された（『毎日新聞』1952年9月3日）。皇居から光輪閣への車列でも、講和条約発効後ということもあり、馬車列にして「皇族としての御列を整えるべき」との意見もあったが、結局孝宮と同じ簡素な自動車列となった⁵⁸⁾。

批判言説の登場

宮内庁が強調する質素さに対して、豊かさを予感させる結婚というズレの中から、逆に贅沢さへの批判という言説も生み出される。

たとえば、鷹司夫妻の新居の建設費は実際には200-350万円だとの見方があり、「住宅難のいまどき怪しからん」との投書が新居に届いた⁵⁹⁾。さらに、孝宮の皇籍離脱に伴う国からの一時金は487万円余であり、戦死者1万人分の手当てと同額なことに「あいた口がふさがらない」との批判が出た（『読売新聞』1950年3月28日夕刊）。この一時金は結婚当日、小切手で支払われ、帝銀木挽町支店の「鷹司和子」名義で預けられたと報じられた。高額の一時金の行方が興味深く見守られたのである。

順宮の結婚では、豪華な嫁入り道具が、庶民には手の届かないというイメージをつけ加えてしまう。朝鮮戦争の影響から当時の実質経済成長率は10%を超えていた。孝宮結婚の2年前よりは、確実に豊かになった分、人びとは「豪華さ」を読み取った。花嫁道具についても『万事

簡素に』整えられたとはいえ、庶民にはやはり眼の毒になる品物」が多かった⁶⁰⁾と評された。前述したように、あやかり結婚もあったが、莊重に行くには費用が足りず5千-2万円の式を挙げるカップルが実際には多かった(『読売新聞』1952年10月10日夕刊)。一時金が孝宮のときからさらに増え700万円となっていた順宮の結婚と、人びとの結婚の間には、大きな差があったのである。これが、批判を招いた要因であろう。社会党の木原津与志はのち衆議院内閣委員会で次のように述べている。

〔順宮の婚姻の際、〕婚礼の道具だけで貨車何両か持っていかれたというようなことが伝えられて、当時一般民間の間には、皇女といえども現在は国民の税金で養われておる人だ、しかも養っておる国民の大部分は嫁に行くのにふるしき包み一つさげていくというような状態の中にある。こういう現実の国民生活の中で、皇女がお嫁に行かれるのについて貨車何両も連ねた嫁入り道具を持っていかれるということは、同じ婚礼でありながらあまりに差がひど過ぎるという声が当時民間にあったわけであります⁶¹⁾。

華美かつ、贅沢であり、一般の人びとが嫁に行く姿とはあまりにかけ離れているという批判であった。

その一方で、逆に、質素さを強調することへの批判もあった。戦前的な価値観からの「平民」イメージへの違和感である。たとえば、ブラジルの南米銀行専務・宮坂国人は、外国雑誌に掲載された、仕事着を着て掃除する孝宮の写真を見て、「女中さんのやう」だと嘆いている。「こんなにデモクラシイになられたといふ処を見せるのがネライ処」であろうが、これを見た日本人がありがたがるのか、外国人が尊敬するのかと、批判したのであった⁶²⁾。

結婚式の服装にも批判が出ている。鷹司・池田の両カップルとも、新郎がモーニング、新婦は袴であった。伝統を無視したような和洋折衷に対して「奇異の印象のみ残った」という批判があった。男性が洋装、女性が和装という折衷ぶりは戦後、民間ではよく見られた衣装であるが、あまりに世俗的という批判であろう⁶³⁾。

内親王の結婚に対しては、贅沢さへの非難がある一方で、その「平

民」性、世俗性にも批判が出る。美智子妃ブームに対する両面からの批判とまったく同じ構図であった。つまり、皇室の民主化と再権威化との相克はすでに昭和 20 年半ばには出始めていたわけである。

メディアへの警戒

宮内庁側をみても、「降嫁」後の元内親王が「人びとと同じように」暮らしているというイメージは大事であった一方で、「平民」的なイメージが行き過ぎ、世俗化してしまうことへの懸念も同時にあった。それはマスメディアへの警戒感に繋がる。

孝宮の婚約時代、侍従職の側近たちは、映画『赤い靴』を孝宮と鷹司の 2 人で見る姿を演出しようと画策した。しかし、田島宮内庁長官の「良家の子女は婚前にはさういふ所へは行かないものだ」との一言で却下される⁶⁴。2 人で映画に行けば、そのイメージがメディアを通じて増幅される。そのことを心配したのだろう。また、自由な取材を求める報道陣と、宮内庁の間に緊張もあった。婚約発表直後の 1950 年 1 月 31 日、皇居の北桔橋門で、ニュース映画社などが孝宮を撮影する機会が設けられた。報道側は一言でも肉声がほしいと事前に要望したが認められず、当日現場でも「ご挨拶だけだからいいじゃないですか」「約束だからやめてください」というやり取りがあった⁶⁵。宮内当局は、孝宮・順宮の肉声がラジオやニュース映画に出てしまうことをきわめて限定しようとしていたのである。さらに、同年 4 月、孝宮・順宮は、清宮とともに三重・奈良・京都に旅行に出たが、途中で記者たちから「宮様に会はせろ」との要求が出た。しかし、同行した入江は強く断わり、「新聞の攻勢から孝宮様をお守りするのに骨を折つた」と書く⁶⁶。宮内当局が統制できる範囲で「平民」イメージを打ち出したかったのであり、マスメディアがそれを越えた「平民」を見せることには警戒的であったのである。

田島や入江が警戒していたものは、たとえば、孝宮結婚翌日の記者会見で出た「どうです、昨夜の感想は」という性的含意のある質問であり（『毎日新聞』1950 年 5 月 22 日）、極端な例でいえば、カストリ雑誌に掲載された「孝宮さまの御新婚初夜」というような覗き見趣味の記事であったろう⁶⁷。

つまり、宮内庁は基本的には質素さを強調することで、若い内親王の

「平民」性をアピールしたいという気持ちを持っていたものの、マスメディアへの過剰な露出によって皇室の権威が損なわれることには警戒感を併せ持っていたのである。

婦人誌と皇室記事

最後に婦人誌と皇室記事との関係に触れておきたい。これまでの美智子妃ブームに関する従来の研究では、ブーム前後に創刊された週刊誌、とくに『週刊女性』『女性自身』などの女性週刊誌が人びとの消費志向と相まってブームを拡大していったとされる⁶⁸⁾。ただし、本論文で見たように、すでに昭和20年代中葉において、大衆誌、とくに月刊の婦人誌が内親王を女性たちの憧れとして描いていた。図は、1947年から1953年まで、『主婦之友』『婦人倶楽部』『主婦と生活』『婦人生活』の4誌が、皇室関連記事、内親王関連記事をどの程度のスペースを割いて掲載していたかを示したものである（ページ数換算⁶⁹⁾。敗戦直後、婦人誌はほとんど皇室を扱わなかったが、1949年ごろから扱うページが増え始め、皇太子外遊の1953年には最高潮に達する⁷⁰⁾。昭和20年代の月刊婦人誌における皇室記事はもっと関心を持たれていいだろう。

雑誌に皇室関連記事が増えたことは同時代的にも注目され、講和が近づくにつれ民族的自負心が強くなったなどの分析があった（『朝日新聞』1950年2月23日）。日本の政治的独立や経済的復興を実感するとき、人びとが参照したのが皇室なのであり、孝宮・順宮はまさにそうした時代に、ちょうど「結婚適齢期」に達した若き内親王なのであった。2人は、外遊、妃選びが注目される皇太子とともに、若さ、人びととの近さが注目され、それが豊かな時代への欲望と一致し、婦人誌を飾る存在になっていたのである。

V. おわりに

孝宮・順宮の結婚について、人びとはその「平民」性と「恋愛」感情に注目した。

「平民」という言葉について、美智子妃の出身である正田家が資本家階級であることを指摘する松下圭一は、「平民」内部で階級が分化する状況こそが問題であるとした。しかしながら、皇族の結婚に人びとが

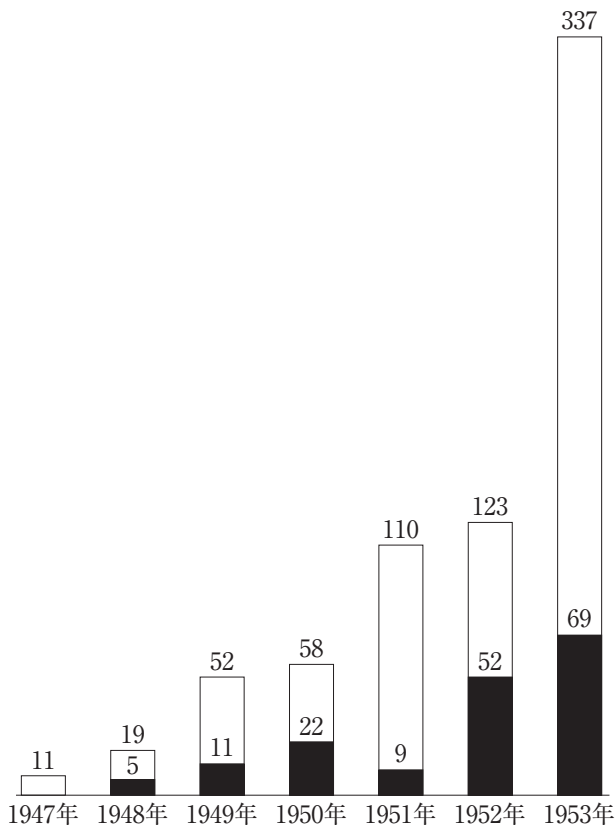


図 婦人誌4誌の皇室関係記事（ページ数）。スミ塗り部分は内親王関係記事

「平民」という言葉を多用したのは、皇室が「私たちと同じ」であるまでに民主化した、あるいは、私たち「平民」の憧れとしての皇室を見たという欲望を反映していた。本来の階級性の意味を離れ、庶民性という意味で使われていたのである。美智子妃の結婚で、「平民」であることがことさら注目されたのは、正田家が階級としては旧「平民」であった以上に、人びとが皇室に「平民」的なものを望んでいたという事情があるだろう。

恋愛については、当時の社会状況が、「見合い」と「恋愛」の中間的な在り方を模索していたことと大いに関係する。「見合い」でも十分な

交際を経て結婚するのが民主的だという規範を受け入れた人びとが、皇室の結婚にも、「恋愛」的な要素を見ようとした。のちの美智子妃と比べると、孝宮も順宮もスタア性をことさら持ち合わせない地味な女性であった。それでも、人びとが2人に注目したのは、そこに戦前とは違う民主的な結婚を見ようとしたためである。この後、皇室のさまざまなカップルは「仲睦まじい」と形容されるようになるが、人びとの側が「仲睦まじさ」を求めていたのである⁷⁾。さらに、人びとは両内親王の花嫁道具の豊かさに生活向上への希望をも読み込み、一方でこれを批判した。こうした欲望は、質素さを強調したかった宮内当局の意向とはズレがあったのだった。

マスメディアを通じた人びとの視線は、けっして当局が「見せたいもの」を見ていただけではなく、自らが「見たいもの」を見ようとしていた。とくに、当時の月刊婦人誌のような大衆メディアは人びとの欲望が反映されやすい。朝鮮戦争が始まり、人びとは、復興、そして独立を実感し、民主化を自らのものにしようとした。その時、参照されたのが皇室であり、人びとは、そのなかに「平民」と「恋愛」を見ようとしたかった。2つのキーワードは、けっして美智子妃の属性だけに帰してよいものではない。

注

頻繁に引用する入江相政・侍従の日記は、日付とともに『入江日記』と略記した。『入江相政日記』2、3巻（朝日新聞社、1990年）。

- 1) 河西秀哉「象徴天皇制・天皇像の定着：ミッチー・ブームの前提と歴史的意義」『同時代史研究』1号、2008年、37頁。
- 2) 井上輝子「マイホーム主義のシンボルとしての皇室」『思想の科学』6次92号（1978年6月号）。
- 3) 森暢平「ミッチー・ブーム、その後」河西秀哉編著『戦後史のなかの象徴天皇制』（吉田書店、2013年）。
- 4) 松下圭一「大衆天皇制論」『中央公論』1959年4月号。
- 5) この写真については、北原恵「正月写真に見る〈天皇ご一家〉像の形成と表象」『現代思想』29巻6号（2001年5月号）が詳しい。
- 6) 北田正武「孝宮さまと宝塚」『じーぶ』1948年9月号、20-21頁。
- 7) たとえば、百武満治子「家事お見習い：孝宮さまのご日常」『主婦と生活』1948年12月号、23-24頁。「家事ご修業の孝宮さま」『主婦と生活』1948年11月号、1頁。宮内府も民間での生活に慣れるよう極力配慮した。

1949年1月、「一般御乗車御習熟のため」「御微行」で沼津御用邸に出掛けた際、警察・鉄道関係に知らせず、孝宮自身が切符を購入した。ところが、東京駅には助役が迎え、車両デッキには警察官が立っていたため、入江は「どうした事か」と嘆いている。宮内庁総務課「幸啓録（皇室内親王御成の部）昭和19～24年」（宮内庁宮内公文書館蔵、識別番号25887）。『入江日記』1949年1月5日条。

- 8) 『入江日記』1949年7月12日条。のち『婦女界』は孝宮の日記風の近況記事（「孝宮さまの花嫁準備日記」『婦女界』1949年10月号）を書いた。
- 9) 『新家庭』1949年2月号、5頁。
- 10) 三笠宮崇仁の言葉。
- 11) 増田淳平「皇后陛下の指輪と毛糸：孝宮さまの御婚約を繞りて」『新婦人』1950年3月号、63頁。
- 12) 小野昇「めでたき話題：孝宮さまの御結婚」『婦人世界』1950年1月号、49頁。
- 13) 国立国会図書館支部宮内庁図書館編『収書目録』1号（1950年）、改定1号（1951年）、同2号（1952年）を参考に、国立国会図書館、北海道立図書館、石川武美記念図書館、日本近代文学館、大宅壮一文庫、国立国会図書館支部宮内庁図書館で収集した。
- 14) 筑摩鉄平「漫画探訪：鷹司和子夫人の迷惑日記」『婦人世界』1950年12月号、124-125頁。
- 15) 『都新聞』の記事は、『九州タイムズ』（同月9日）、『夕刊新東海』（同）に転載され、『大阪新聞』（同月12日）が追いかけた。東京で続いた新聞はないが、雑誌『社会人』（1949年10月号、109頁）が、大谷との婚約の情報を伝えるなど、中央のメディア関係者にも、大谷の噂は知られていた。
- 16) 『入江日記』1949年12月5日条。
- 17) 加藤恭子『田島道治：昭和に「奉公」した生涯』（TBSブリタニカ、2002年）、269頁。『昭和天皇実録』1950年1月2日条。正式な裁可は1950年2月10日。戦前の内親王の結婚では、旧皇室典範で、婚嫁には勅許が必要とあったが、新憲法では「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立」とされており、裁可は公表されなかった（『昭和天皇実録』1950年2月10日条、同3月3日条）。
- 18) 加藤前掲書、270頁。『入江日記』1950年1月20日条。『昭和天皇実録』1950年1月20日条。
- 19) 藤桎準二「およろこびを前の孝宮さま」『サンデー毎日』1950年2月26日号、19頁。
- 20) 「婦人の眼：鷹司平通氏夫人へ」『女性改造』1950年5月号、11頁。
- 21) 『入江日記』1950年4月29日条。
- 22) 「孝宮様の背の君鷹司平通氏が語る私たちの新婚生活設計」『婦人生活』

- 1950年6月号、57頁。
- 23) 「厚子夫人お国入り」『アサヒグラフ』1952年11月5日号、10頁。
 - 24) 池田徳真「若き牧場主の素描：鳥取の池田が見た岡山の池田家の人びと」『婦人画報』1951年10月号、65頁。
 - 25) 中津屋三郎「家畜と共に寝起き：背の君・隆政氏の生活ぶり」『主婦と生活』1951年9月号、50頁。
 - 26) 『入江日記』1951年5月12日条。加藤前掲書、293-294頁。『昭和天皇実録』1951年5月14日条。
 - 27) 「“牧場の花嫁” 24時間」『週刊読売』1952年10月26日号、5頁。結婚当日の記者会見によれば、順宮は月5回くらい手紙を出していたという（『毎日新聞』1952年10月11日）。
 - 28) 前掲「“牧場の花嫁” 24時間」4頁。
 - 29) 阿部艶子「池田隆政氏と厚子夫人の新婚生活を岡山に訪ねるの記」『婦人生活』1953年1月号、114頁。
 - 30) 国立国会図書館支部宮内庁図書館編前掲、2号（1952年）、3号（1953年）、4号（1954年）を参考にした。収集した図書館は、注13と同じ。
 - 31) 6誌は1947年にはそれぞれ30万部前後を達成し（『昭和22・23年版日本出版年鑑』（日本出版協同株式会社、1948年、24-25頁）、52年には前4誌は60万部前後になった（『出版年鑑1953年版』（出版ニュース社、1953年）、4頁）。1948年調査の「毎月読んでいる雑誌」では、2位『主婦之友』、3位『主婦と生活』、4位『婦人世界』、5位『婦人生活』、6位『婦人倶楽部』、11位『ホーム』と上位を占め、影響力も大きかった（毎日新聞世論調査部編『読書世論調査』（毎日新聞社、1949年）、47頁）。当時は、貸本屋や友人との貸し借りを通じて部数以上の読者がいたこと、婦人誌に対する現在のイメージと違い、未婚女性や男性の読者が少なくなかったことに注意する必要がある。
 - 32) たとえば、「農村女性の抱負を聞く：山梨県において」『婦人倶楽部』1947年2月号、30-31頁。
 - 33) 「座談会：愛情と結婚の問題」『婦人倶楽部』1947年10月号、27頁。
 - 34) 「新時代の恋愛と結婚を語る座談会」『主婦と生活』1946年6月号、16頁。
 - 35) 「こんな結婚をさせたい」『婦人倶楽部』1948年9月号、30-31頁。
 - 36) 前掲「新時代の恋愛と結婚を語る座談会」17頁。
 - 37) 内山恒「幸福になる恋愛・悲劇に終る恋愛：母の日記（8）」『婦人生活』1947年12月号、17頁。
 - 38) 山田昌弘『結婚の社会学：未婚化・晩婚化はつづくのか』（丸善、1996年）102-105頁。
 - 39) 「若い男性ばかりの座談会」『婦人倶楽部』1946年2月号、6-7頁。
 - 40) たとえば、若い未婚女性の代表として座談会に出席した医師の娘の発言

- (「娘さんと花嫁さんの結婚座談会」『主婦之友』1948年10月号、16頁)。
- 41) 山際よし子「パーティー交際から理想の結婚へ」『婦人倶楽部』1947年12月号、30頁。
 - 42) 「花嫁会議」『ホーム』1948年12月号、20頁。
 - 43) 「見合い」においても個人の自由意思をある程度認めるべきだという言説は、戦前期にも存在し、桶川泰は「お見合い至上主義」言説と呼んでいる。桶川泰「大正期・昭和初期における『婦人公論』『主婦之友』の恋愛言説：『お見合い至上主義』言説・『優生結婚』言説の登場とその過程」『フォーラム現代社会学』6号、2007年。戦後になり、恋愛の正当性がより大きくなったため、恋愛を既存の秩序のなかに訓化する必要性が、戦前と比べ、増したということだろう。
 - 44) 安藤由美「戦後の家族変化再考：配偶者選択、性別役割分業をめぐって」『人間科学 琉球大学法文学部人間科学科紀要』10号、2002年。
 - 45) 「戦後派恋愛結婚の在り方：第一線の新聞記者大いに語る」『新婦人』1950年6月号、54頁。
 - 46) 当時の新聞には大阪大学理工学部卒と誤記しているものが少なくないが、鷹司が卒業したのは大阪理科大学である。
 - 47) 菊名三郎「人間皇女の恋」『女性改造』1950年9月号、91-92頁。
 - 48) “Honorable Dagwood,” *Time*, February 6, 1950, p.27.
 - 49) 「生涯の晴れの日の装い」『新婦人』1950年10月号、3頁。
 - 50) 前掲「孝宮様の背の君鷹司平通氏が語る私たちの新婚生活設計」58頁。
 - 51) 前掲「婦人の眼：鷹司平通氏夫人へ」12頁。
 - 52) 前掲「牧場の花嫁」24時間」8頁。『山陽新聞』1952年10月10日夕刊。
 - 53) 「順宮さま嫁入り道具」『アサヒグラフ』1952年10月29日号、12-13頁。
 - 54) 2人の結婚に、「ブロンディ」が参照されることは少なくない。孝宮婚約を伝える米週刊誌『タイム』の見出しも、Honorable Dagwood（高貴なダッグウッド、ダッグウッドはブロンディの夫の名）だった。“Honorable Dagwood,” op. cit.
 - 55) 『内外タイムス』1950年3月4日など。
 - 56) 『入江日記』1950年4月20日条。
 - 57) しかし、実際には宮内庁の同意なく、自動車を購入している（『入江日記』1952年5月1日条および7月10日条）。
 - 58) 「入弟の儀御列伺い」宮内庁式部職1952年9月22日立案（情報公開法による宮内庁開示文書）。結婚にあたって昭和天皇は「なるべく民間風にとの考えを、宮内庁長官に伝えていた（『入江日記』1950年2月17日条。『昭和天皇実録』1950年2月16日条）。
 - 59) 「新居は愉し」『アサヒグラフ』1951年4月4日号、8頁。『読売新聞』（1950年5月4日夕刊）は、70-80万円と低めの額を挙げていたが、こ

らは宮内庁による安めの見積もりをもとにした額だと思われる。

- 60) 前掲「順宮さま嫁入り道具」12頁。
- 61) 衆議院内閣委員会会議録、1959年3月5日。
- 62) 宮坂国人「孝宮様のお写真」『文芸春秋』1950年7月号、21頁。宮坂の言う外国雑誌の記事とは、“Honorable Dagwood,” op. cit. および“Grooming a Princess,” *Newsweek*, February 6, 1950, p.32 だと思われる。両誌には、写真1と同じシーンが掲載されている。
- 63) 船田文子「花嫁姿と天皇御一家」『装苑』1952年11月号、85頁。
- 64) 『入江日記』1950年4月15日条。
- 65) 「日本ニュース」213号（1950年2月7日）。
- 66) 『入江日記』1950年4月8日条および同年年末所感。
- 67) 「孝宮さまの御新婚初夜」『青春タイムス』1950年7月号。
- 68) 吉見俊哉「メディア天皇制とカルチュラル・スタディーズの射程」花田達朗ほか編『カルチュラル・スタディーズとの対話』（新曜社、1999年）など。
- 69) 内親王関連記事には、東久邇成子の記事も含む。
- 70) 用紙事情の好転で、1950年の平均ページ数は前年の2倍になるなど各誌増ページした（『出版年鑑1951年版』（出版ニュース社、1951年）、26頁）という要因もある。
- 71) 婦人誌には、昭和天皇夫妻の新婚時代の睦まじさを描いた読み物もあった。たとえば、丘咲八朗「天皇ヒロヒト御夫妻」『ホーム』1949年11月号。